

バングラデシュからの手紙 2010年

親愛なる友人のみなさんへ

マイメンシン(バングラデシュ)2010年夏
ブラザー・フランク(テゼ共同体)

肺に影が見つかり、精密検査のため、最近フランスのテゼに1か月間滞在しました。そして、特別問題ないことがわかり、このマイメンシンに戻ってきました。実に多くの人々がお祭りを祝うようにわたしの帰りを喜んでくれました。そして、わたしの検査中の日々、無数のキリスト教徒、イスラム教徒、ヒンズー教徒がわたしのために祈っていてくれたことを知りました。それは、長い間に育まれた友情と連帯のしるしでした。互いのために存在し合うところに、神がともにおられるというしるし。

復帰してすぐに、ここでの日常生活のダイナミックな豊かさが、再びわたしを包みました。障がい者との関わり(C.C.H、ラルシュのコミュニティ、デイケア・センターなど)、いくつもの小学校(およそ2,000人の子どもたち、学校に行かない貧しい子どもたちのための寺小屋など)、病人のケア、そして個人的の話のためにやってくる若者たちを迎え入れる働き……。そして、1987年にここに来たときからいつもそうであり続けたように、わたしたちの生活の中心にあるのは祈り。毎日このテゼ・ハウスの聖堂では三回の礼拝が行われ、青年たちが毎回それに加わります。また同時に、祈りは、ラルシュのコミュニティや作業場、そしてデイケア・センターなどでも捧げられています。そこでは、イスラム教徒、キリスト教徒、ヒンズー教徒がともに、神から与えられた新しい一日を感謝し、沈黙の内に、あるいは心から湧き起こる単純な言葉を通して、天からの祝福を願うのです。

これらのイスラム教徒、キリスト教徒、ヒンズー教徒が弱い人や貧しい人に一緒に奉仕するこの小さなしるしが、多くの人々に希望をもたらすものになるようにと心から願っています。あらゆるところで、人々は分裂し対立しています。しかし、一緒に弱い人々に仕えてゆくときに、人々はひとつにされてゆくのです。今日の世界の暗闇の中で、光は決して不在でないこと、その光の源は神の内にあることを、イスラム教徒、キリスト教徒、ヒンズー教徒が日々の生活のあり方によって示すのです。バングラデシュでこの光が輝くならば、わたしたちは心の目で、世界中の多くの人々が、そ

の生き方によって、光となっていることに必ず気づくと思います。

《障がい者と歩む信頼の巡礼》

以前の手紙で、わたしたちには毎年「テーマ・ソング」があることをお伝えしました。今年のテーマ・ソングの歌詞は、ヒンズー教徒の詩人タゴールの美しい詩からとられました。「主よ、あなたの御心が、わたしたちの日々の生活の内に行われますように」。わたしたちは、この歌を、障がい者との信頼の巡礼の間、歌い続けました。

この巡礼は10年間続けられてきました。最初の巡礼は2001年に、このマイメンシンの地域で開催され、参加者はそれほど多くありませんでした。障がい者たちとその家族、そしてボランティアとして協力した何人かの青年たち。しかし、2009年、この巡礼は、キリスト教のNGOであるカリタスからも協力を得て、バングラデシュの10の地域で開催され、数千の人々が参加しました。今年の巡礼の参加者はさらに増え、ある地域ではキリスト教徒だけの巡礼ですが、ほかの地域では、イスラム教徒とヒンズー教徒も参加するようになりました。

このタゴールの歌は、このマイメンシンで毎月開催される、知的な障がい児とその母親たちの二つの集いでも歌われています。ティナとそのチームは、大きな喜びと献身でこれらの集いをリードし続け、ボランティアの青年たちや数名の母親たちがそれに協力しています。「喜びの光」と名付けられたこれらの集いの時間は、母親たちにとってとても大切なときとなっています。このような巡礼すべてが、「日々の生活の内に行われている神の御心」をすでに表現していないでしょうか。

《村で奉仕する学生たち》

他の分野——村における学生たちの働き——でもこの歌は歌われ、その意味が黙想されています。この学生たちは、勉学への援助として毎月350タカ(450円)を受け取り、そして一方、村で貧しい子どもたちの勉強を支えたり、地域の障がい者たちを助けます。毎月一日、祈りと分かち合いのために集まり、福音に沿った生活への原動力を見出すために、互いに励まし合うのです。

《日常生活に影響を及ぼす今日^{こんにち}の変化》

バングラデシュにおいても、多くのことが急速に変化しています。若い成人の3人に1人は携帯電話を持ち、ますます多くの自家用車が、主にダッカで、大きな交通渋滞を起こしています。少数派の中産階級あるいは非常に富んだ人々、多数派である膨大な数の貧しい人々の格差は急速に広がっています。

ここで主の御心とは何でしょうか。それは貧しい人や弱い人々と連帯して生きること、彼らと分かち合って生きることではないでしょうか。それは異なる背景の人々の間に橋を築くこと、彼らが出会い、それによって考え方が変えられてゆくことではないでしょうか。人を歓迎すること、中でも大切にされていない人々を歓迎することではないでしょうか。「愛しなさい。みずからの生き方によってそれを表しなさい」、これは、わたしたちみんなにとって、生き方のもっとも基本的な動機付けなのです。

何年も前にここで始めて、今もまだ成長し続けている様々な活動が、多くの喜びを与え、わたしたちはそれに感謝しています。いろいろな問題は確かにあります、しかし、心を合わせて、神の息吹の中で、わたしたちは常にその問題を解決する道、あるいはその問題と共存してゆく道を見出してゆくのです。

《障がい者のためのコミュニティセンター(CCH)》

CCHは、マイメンシンから20kmほど離れたムクタガチャという町に、小さな支部を始めました。もう長い間、この町の貧しい障がい者たちとわたしたちは関わってきました。中には、マイメンシンのCCHまでやってきて理学療法を受ける人もいたり、またハルン(ティナの夫)がムクタガチャの子どもをダッカに連れてゆき、そこで手術を受けさせたこともありました。しかし今は、毎月2,600タカ(3,400円)でムクタガチャに小さな家を借りて、そこがCCHの支部として活動が始まったのです。JOCS(日本キリスト教海外医療協力会)から数年前に派遣された理学療法士のアヤコ(山内章子さん)は、毎週一回仲間のスタッフと一緒にそこに行きます。またハルンは、マイクロ・クレジット(少額融資)を受けている貧しい家庭の窓口となり、また女性クラブ担当のタハミナは、そこで裁縫^{ししゅう}と刺繍^{ししゅう}のグループを始めました。

3月に、障がい者たち数百人がこのテゼ・ハウスの前の

広場に集まり、年に一回のスポーツ大会が開かれました。ちょうどバングラデシュを訪問中だったオランダのわたしの弟と妹もこのイベントに加わり、それはとても楽しい一日でした。

女性クラブの裁縫グループは、見事な品を作り続けています。刺繍^{ししゅう}のほどこされたシャツ、テーブル・クロス、ベッド・カバーなど・・・よく売れています。時々、ダッカでも販売の機会があります。カーペットの販売に関する課題は今も続いています。しかし、年に2回、オランダ大使とフランス大使が、その自宅を大きなお店として開放していただき、そこで女性クラブのカーペットは売られるのです。そのおかげで、カーペットの作業場は維持され、その活動は継続しています。この作業場には15人の障がいをもった女性たちが働き、それによって彼女たちは生計を立てています。

《知的な障がいをもった子どもたちのデイケア》

今年ティナは、マイメンシンの別の地域に、知的な障がいをもった子どもたちとその母親のための三つ目のデイケア・センターを始めました。

《ラルシュ・コミュニティ》

男子のホームの一つ「ショップノニール(夢の家)」は、最近、新しい場所に引っ越しました。その結果、ラルシュ・バングラデシュを構成する三つのホーム(二つの男子のホームと一つの女子のホーム)は、互いにとても近い距離になりました。これらのホームは、ラルシュのワークショップ(作業所)とも、またわたしたちテゼのブラザーが生活するテゼ・ハウスとも近い所にあります。互いに近くにいることによって、ラルシュ・コミュニティと一緒に生活し活動することがとても容易になりました。オランダの支援者や日本の教会関係の方々からの支援によって、一つの家を拡充し、そこに「ショップノニール」が引っ越してくることが可能になったのです。ラルシュ・バングラデシュは、多くの人々にとって、とても大きな贈り物であり、同時に日々チャレンジの場でもあります。ラルシュ・バングラデシュのコミュニティ・リーダーはナオミ(岩本直美さん)です。彼女は、アヤコと同じJOCSから派遣されました。ナオミをすばらしくサポートしている人たちの一人が、アイルランドから来たエレノアです。彼女の献身は長年このコミュニティを支えてきました。彼女のおかげで、最初の小さなホーム「アシャニール(希望の家)」が生まれたのでした。今日^{こんにち}、知的な障がいをもった25人ほどの仲間

たちと15人のアシスタントと一緒に暮らすラルシュ・バングラデシュの生活は、弱く傷つきやすい人々とともに生きようとする、愛の力強いしるしとなっています。それによって、多くの人々が愛すること、大切にすることについて心をとめるようになったのです。

《マイクロバス》

CCHが、昨年ドイツのキリスト教団体からいただいたマイクロバスのおかげで、多くの障がい者の移動が可能になりました。互いに訪問し合うことは、とても大切なことです。新しい可能性が与えられたことにとっても感謝しています。

《スラムやその他の貧しい地域で暮らす子どもたち》

マイメンシンの鉄道駅やスラムで暮らす子どもたちとわたしたちは、長年、深い友情で結ばれています。ブラザー・ギョームは、ハニフの協力のもと、この友情を大きな愛と誠実さで育てています。毎日、このような子どもたちの中から4人を選び、わたしたちの昼食に招待しています。毎週水曜日には、スラムに暮らす6～8人の少女(7～11歳ぐらい)を招いて、一緒に昼食をいただきます。この少女たちを売春から守る方策を、最近マイメンシンに来られた韓国のシスターたちと相談しながら、模索しています。そのような方策はどこにあるのでしょうか。

駅の周辺で暮らす子どもたちのために、スラムのすぐ脇に、ブラザー・ギョームとハニフは2009年に「クラブ」を始めました。このクラブは、「みんながキング、みんながクイーン」と名付けられました。この子どもたちがクラブに集まるのはたいてい午後の時間帯です。というのも、彼らは、午前中にゴミ箱や汚れた町の通りから古紙を拾い集めることによって、2～3タカ(2.5～4円)を稼ごうとするからです。ときには、1日で30タカ(40円)を稼ぐこともあり、それはちょうどお米1kg分になります。クラブに集まるとき、彼らは本当に幸せな子どもたちになります。彼らは歌います、彼らは絵を描きます。そしてよく遊びます。そして、終わりには、彼らは沈黙のうちに座り、驚くべき心の豊かさで、ハニフが語るわずかなことばについて考えるために黙想するのです。沈黙の後、この数日に起きた出来事について何人かの子どもたちが分かち合います。

《学校》

ビンパラ

わたしたちが最初に始めた小学校で、ブラマプトラ川の

向こう側にあり、このテゼハウスからも近い所にあるビンパラ小学校からとてもいい知らせがありました。この学校は、1987年に、たった1クラスで、小さな竹小屋で始まりました。ビンパラは低地にあり、雨季になると毎年洪水の被害にあっていました。この地域に暮らすヒンズー教徒やイスラム教徒と、わたしたちは次第に深く知り合うようになり、学校にくる子どもたちの数は非常に増えていきました。2010年、およそ400人の子どもたちがこの学校に通っています。竹とタンで作られた建物はすっかり痛み、修復が必要となりましたが、それには多くの資金が必要でした。そこに、ルクセンブルクのある団体から、校舎の半分を新たに作る目的で、8,000ユーロ(約90万円)が寄せられたのです。そして残りの半分の費用は、大きなNGOであるワールド・ビジョンが提供することになりました。洪水に耐える堅固な建物が与えられることは、この学校にとって大きな前進です。

ボロビラ

ボロビラは、マイメンシンから北に5kmほど行ったところにある村です。この3月の初めに、1990年に始められたこの村の学校の10周年をチャチャとともに祝い、そこにはボロビラの村人が千人以上集まりました。1987年、マイメンシンに移り住んだ直後、わたしたちはこのチャチャ(伯父さん)に出会いました。当時彼は、村から町に毎日出てきて、家々の庭で働き、木々を切り、それは調理のための燃料として使われました。当時この町にもガスがあまり普及していなかったのです。

チャチャは、わたしたちが信頼を置く友人になり、困難な時期にはわたしたちの傍に立ち続けてくれました。たとえば湾岸諸国、イラクそしてアフガニスタンでの戦争の間、教会やクリスチャンが運営する団体の周辺の多くの場所では、警察による警備が必要でした。そのようなときに、チャチャはこの場所を守る役割を担ってくれました。

彼の村を初めて訪問してまもなく、わたしたちはそこで小さな学校を始めました。この地域の子どもはだれ一人学校に行っていなかったのです。現在400人以上の子どもたちがその小学校で学び、卒業生の中には現在この学校で教えている人たちもいます。この3月に開催された記念祝典では、子どもたちがこの学校の歴史とそれによってどのような変化がもたらされたかを演じました。バングラデシュの初老で貧しいイスラム教徒チャチャとヨーロッパから来たクリスチャンのブラザーたちとの長い友情の物語を、小さな子どもたちが演じているのを見ることは、とても感動的でした。

バングラデシュの学校と教育の制度

以前の手紙に書いたように、バングラデシュで子どもたちのためにふさわしい教育方法を見つけることは、今でもなかなか難しい課題です。多くの人々が、さまざまなアプローチを試みています。ほとんどの公立学校において、教育の場は混乱と方向性のないくり返しにあふれ、そこには創造性が欠けています。組織の維持が重要で、子どもたちは何も理解せずにとだ暗記するだけです。学んだことを深く理解しようとするのはそこではあまり重要視されていません。わたしたちの学校では、もっと別の道を模索しています。いかに教育と子どもたちの日常をつないでいくことができるのでしょうか。ブラザーの一人が関わる若者たちのグループは、演劇を子どもたちの教育の中に取り入れています。彼らはいろいろな学校で、スラムや村々の日常を寸劇で演じています。劇の後には対話が生まれます。親たちもその場に招待されます。彼らが演じるのは、家族の喧嘩の場面、息子・娘の結婚に端を発した家族騒動、同じ村に生きるイスラム教徒とヒンズー教徒の間の緊張などです。その他様々なことが寸劇のテーマとして取り上げられます。「仲良く平和に暮らすためにどんな工夫が可能か」「汚職や腐敗がはびこる中で、どのように正直に生きることができるか」「多額の賄賂を払うことができないという理由で就職ができないという現実を前にして、勉強することにどんな意味があるのか」「学歴のためにだけわたしは勉強しているのか」「わたしは自分の生活を、そしてこの国の有り様を変えることができるのか」など。このようにして、わたしたちの小さな学校の教育は、この国の大きな流れに逆らって進もうとしています。他の学校もその歩みに加わってくれるでしょうか。

《青年たちへの関わり》

マイクロバスが与えられたおかげで(週日はほとんど障がい者たちのために使用されていますが)、マイメンシンから離れたところに住むキリスト者とながることが容易になりました。わたしたちは、若いキリスト者の集いによく招かれます。テゼの黙想的な歌を用いた祈りの集いをリードするためです。交通の便が極めて限られているので、マイクロバスが来る前は、このようなキリスト者の群れを訪れることは、とても難しいことでした。今では、以前から一緒に祈りの集いを手伝ってくれている青年たちを連れて、遠く離れたところで開催される青年の集いや教会の集会に出かけることが容易になりました。この超教派で司牧的な働きは大きな

喜びです。これは、地域の諸教会の働きへのわたしたちの参与を示すとても大切なしるしです。

《その他の活動》

この手紙は、すでにかなり長いものになってしまいました。でも、お伝えしたことはまだまだたくさんあるのです。どうしたら周辺にいる人々と毎日どのように関わって生きているかを詳細にお伝えすることができるのでしょうか。ほぼ35年間にわたって、わたしたちを自分たちのただ中に迎え入れてくれている人々のことです。たとえば、トゥルーについてたくさんのお話を語ることができます。彼は、毎日病人を世話し、病院へ連れていってくれます。薬代をわたしたちが負担する場合も少なくありません。友人たちからの献金のおかげで、貧しい人々の小屋をいくつも修理することができました。その中にはとても高齢な老人の小屋もいくつかありました。また、ある特別の献金によって、50の極めて貧しい家庭に、毎月10kgのお米(300タカ・約450円)を提供することができました。これらの活動は、目立たないように、極めて控えめに行われています。また、収入を生み出すためのマイクロ・クレジット(少額融資)のプログラムは、多くの障がい者の大きな支えとなっています。この一年間に、およそ120の家族が、このプログラムの恩恵を受けました。

《Ubi Caritas...》

疲労困憊^{こんぱい}や非常にかかりさせられる日もあります。そのようなとき、貧しい人たちが、わたしたちの新しい始まりの活力の源となります。彼らの存在は、前に歩き続けるようにとわたしたちを励まし、あの歌を内側に呼び覚ましてくれるのです。「主よ、あなたの御心が、わたしたちの日々の生活の内に行われますように」。そしてこれは、以前ブラザー・ロジェが書いておられることを指し示してくれます。「そこから逃げないように。いや、そこに向かって走ってゆきなさい。」周りにいる多くのすばらしい人々に心を開くこと、父親が蒸発してしまった後で大きな家族を支えている母親に心を開くこと、遠くの人々を訪問しようとするおしめない気持ちにあふれる青年たちを称えること……。そして、毎日新たに、心の内にあの歌が何回も沸き起^おこるのです。「Ubi caritas, Deus ibi est」(慈しみのあるところに、神はおられる)。

ブラザー・フランク